

ヘブル人への手紙11章24-27節 「世の富にまさる辱め」

1A 信仰による選択 11:1

1B 希望の実体

2B 目に見えないものの確信

2A 苦しみの選択 24-25

1B ファラオの娘の息子

1C あらゆる学問

2C 罪の楽しみ

2B 神の民の苦しみ

1C 卑しい奴隷

2C 神に属する者

3A 富にまさる辱め 26

1B キリストのゆえの辱め

2B 与えられる報い

1C はかない罪の楽しみ

2C 永遠の資産

3B 神の比較

1C 重い栄光と軽い患難

2C 神の愚かさと人の賢さ

4A 目に見えないものを見る忍耐 27

本文

ヘブル人への手紙 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、10 章まで来ました。今日は午後礼拝で、11 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は 24 節から 27 節までに注目します。「²⁴ 信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、²⁵ はかない罪の楽しみにふけるよりも、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。²⁶ 彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。²⁷ 信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。」

1A 信仰による選択 11:1

ヘブル 11 章は、「信仰の殿堂」と呼ばれる有名な箇所です。数多くの信仰の勇士が行ったことが、列挙されているところです。その信仰というものが、何であるかを 11 章の初めに、著者が教えています。「11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるもので

す。」信仰というものが、一体なんであるかを知ることは非常に重要になります。

1B 希望の実体

初めに、「望んでいることを保証」するものだとあります。ここの「望んでいること」であります、自分の希望のことではありません。私たちは、すでにヘブル書 1 章から 10 章まで、じっくりと見ていきました。これは、キリストについての希望であり、キリストが来られる約束についての希望です。神ご自身に希望を寄せることです。

その希望を保証するものとあります。ここは、他に「実体」と訳しています。希望しているものの実体と訳すことができるのです。希望といっても、実体のない空しいものではないということです。パウロが、死者の復活がなかったのであれば、キリストもよみがえられなかったことになる。キリストが復活していなかったら、私たちの信仰は空しく、今もなお罪の中にいると話しています（1 コリ 15:17）。何か、こうあったらいいなあ～という願望ではなく、実体があって、しかしそれを目で見ることができないから、実体があることを目で確認しなくても確信しているのです。これが信仰です。

みなさん、私には脳みそがあることを信じているでしょうか？「何言っているんですか？」と、今、ちょっと戸惑ったと思います。あるに、決まっているでしょう！という反応ですね。では、目で確認しましたか？していませんね。医者が、CT などで確認する、もっとはっきり目で見ると、脳外科医が私の頭にメスを入れて、それで脳があることを確認しないと、目で見たとということになりません。ですから、脳外科医の証言を信じないといけません。相当のことがなければ、みなさんは私の頭に脳があることを、目で確認することはできません。「信仰というのは、人を盲目にする」と、多くの方がいますが、人が、これはあると、その実体を確信しているもののほとんどが、まだ見ていないのに、信じているものなのです。

それと同じように、神とキリストを信じること、この方が語られたことを信じることも、何かこうであったらいいかな？と思い描くことではなく、実体があるけれども、目に見えないから信じるということなのです。それほど、確かなものなのです。

2B 目に見えないものの確信

次に、「目に見えないものを確信させる」ものなのです。確かに実体があることを、確信しているかないかで、信仰があるかないかを確かめることができます。信仰について、悩む人が多くいます。それは、知性で理解していることなのか？それ以上に、感じ取らないといけなやか？それとも、念じて強く抱いていないといけなやか？とか、いろいろありますね。けれども、イエス様のことばを思い出してください、からし種のほどの信仰があれば、山を動かすことができると言われました。信心深さの度合いではないのです。

そこで「確信」という言葉が大事なのです。物が落ちることを、みなさんは強く念じますか？いいえ、物は落ちます。たとえ、それをまだ見ていなくても、落ちることを知っています。これが確信です。自分で確信しているかどうか分からないほど、もうすでに信じているというのが、矛盾した表現ですが、確信です。みなさん、自分の罪を赦されていることを知っていますか？このことばに、「まあ、言われるまでもなく信じていますけれども・・・」と思われた方が多いかと思います。その、言われるまでもなく・・・というのが、確信なのです。これは、自分で一生懸命、念じて、信じてできるものではなく、神の恵みによって、素直に受け入れている状態のことを指しています。何か特別に、感じ取っていることが確信ではありません。深く理解している知性が確信ではありません。その通りです、と真理に対して、そのままうなずいて、受け入れている状態が確信です。

2A 苦しみの選択 24-25

そこで本文を見ていきますが、24 節から 26 節は、モーセが四十歳になって、エジプトから離れる時のことを話しています。その時に、彼が信仰を働かせたことを語っています。私たちも、自分たちの人生や生活の中で、岐路に立つことがあります。こちらに行ったらよいのか、それともあっちなのか？その時に、選び取る必要がありますね。モーセは、楽しみよりも苦しみを選び取りました。

1B ファラオの娘の息子

24 節、「**信仰によって、モーセは成人したときに、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒み、**」とあります。モーセが、ファラオの娘によって、ナイル川で拾われたことを思い出してください。ファラオは、ヘブル人から生まれた男の子は、ナイル川に投げ込まなければいけないと命じられていましたが、両親は、三カ月間自分たちのところにおき、ついに隠せなくなったので、パピルスのかごの周りに、瀝青と樹脂をぬって、その中にモーセを入れました。彼を見つけたのが、ファラオの娘です。そして、自分の息子として育てました。

1C あらゆる学問

エジプトと言えば、当時の世界でもっとも強い、超大国です。知識や学問においては、ダントツに優れていました。ステパノがこう言っています。「使 7:22 モーセは、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにも行いにも力がありました。」モーセは、世界の中で超一流のエリートとしての線路が敷かれていたのです。

2C 罪の楽しみ

しかし、同時にエジプトは、罪にあふれていました。「**はかない罪の楽しみにふけるよりも**」とあります。その性道徳は、エジプトの宗教の慣わしと共に、実に忌まわしいものでした。エジプトの宮廷の中にも、性の乱れはありました。そこで、モーセは、ファラオの娘の息子と呼ばれることを拒んだのです。その理由は、「信仰」です。目で見えるところ従えば、それは実に優雅でありましたが、彼は、目で見えないところに目を留めたのです。

2B 神の民の苦しみ

そして、「むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。」とあります。

1C 卑しい奴隷

イスラエルは、神の選びの民です。しかし、モーセの生きていた時には、彼らは忌み嫌われている奴隷です。

2C 神に属する者

しかし、モーセは、これらイスラエル人なのだと、彼らと共にいることを選び取りました。それは、彼らが「神の民」だからです。神に属する民と一つになることを彼は選び取ったのです。神に属する者になるということは、世から切り離されることであります。イエス様が、弟子たちに言われました。「ヨハ 15:19 もしあなたがたがこの世のものであったら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではありません。わたしが世からあなたがたを選び出したのです。そのため、世はあなたがたを憎むのです。」ですから、見た目では憎まれている、イスラエル人なのですが、モーセは、信仰によって彼らを見ていたのです。

3A 富にまさる辱め 26

そして、「²⁶ 彼は、キリストのゆえに受ける辱めを、エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さなかったからでした。」

1B キリストのゆえの辱め

モーセは、キリストが現れるはるか前にいましたが、しかし、その時にすでにキリストの御霊が彼の上におられました。彼が、イスラエルの民と共にいることを選んだ時に、キリストの辱めも受け取っていたのです。キリストの辱めとは何ですか？そうです、主イエスが死刑に定められ、むち打たれて、衣服を脱がされ、十字架を背負って、人々の中を歩かされ、そして人々の見えるところで、手足に釘を打たれて、十字架にはりつけにされたのです。それは、肉体の苦痛は言語に絶するものですが、それだけでなく、自尊心をすべて剥ぎ取られた、まさに「辱め」なのです。

パウロは、福音を恥としないと言いました。福音を信じるということは、自分自身を、その弱き姿、ありのまま姿で生きるということです。これまでは、自分自身を、その罪と共に隠して生きていました。けれども、今の自分はキリストと共に十字架につけられ、キリストが自分の内に生きていてくださいます。ですから、キリストが辱めを受けられたように、自分自身が世においては、嫌われていく存在になるのです。

2B 与えられる報い

しかし、「エジプトの宝にまさる大きな富と考えました。それは、与えられる報いから目を離さな

ったからでした。」と言っています。なぜでしょうか？

1C はかない罪の楽しみ

エジプトの宝は、「**はかない罪の楽しみ**」なのです。楽しみは、その時にしか与えられない、はかないものなのです。楽しみは続きません。むしろ、楽しんだ後の苦しみが長く続くこととなります。「箴 20:17 だまし取ったパンはうまい。しかし、後でその口は砂利でいっぱいになる。」

2C 永遠の資産

エジプトの富は、その罪のゆえにはかないですが、対して、キリストにある辱めには、報いがあります。「**与えられる報いから目を離さなかった**」と言っています。これは、永遠の報いです。永遠の資産です。

そこで、モーセは、しっかりと比較しました。とこしえの、キリストにある富を得るために、はかない罪の楽しみを退け、キリストのゆえの辱めを選び取ったのです。一時期の富や罪の楽しみと、とこしえの主の前にある楽しみを比べたのです。モーセは、その苦しきは、40歳の時から120歳の時まで続きました。80年間です。けれども、モーセは今に至るまで、つまり、紀元前1400年頃から今に至るまで、天にある報いに預かっています。実に、3500年近く、キリストにある富を味わっているのです。どちらが、優れているでしょうか？もちろん、後者ですね。彼は賢い選択をしたのです。

そこで思い出すのが、詩篇73篇です。アサフの賛歌ですが、彼は信仰から後ずさりして、すべてしまいそうになっていました。それは、悪い者たちが栄えているのをうらやんでいたのです。神を敬わず、むしろ侮っているのですが、それでも安らかで、富を増しています。それに対して、自分自身はいったい何なのか？ただ空しく、自分の心を清めているだけではないか？と思いました。ところが、彼は、神の聖所に入ります。アサフは礼拝賛美の導き手ですから、神の聖所に入ったのです。すると、目に見えない世界、信仰によって見える世界を見たのです。その悪者たちは、「滑りやすい所」に置かれていて、滅びに突き落とされることを知りました(18節)。

だから、信仰がとても大切なんですね。希望していることが、単なる自分の妄想の中の願いではなく、実体がともなっています。そして、目に見えないものを、確信させるのです。

3B 神の比較

チャック・スミスはこう言いました。「神の下さる最悪のものは、世の与える最高のものより、すぐれている。」キリストのゆえに辱め、迫害や困難は、神のくださる最悪のものです。しかし、その最悪なものは、この世の与える最高のものより、すぐれているのです！パウロがこう言いましたね。「Ⅱコリ 12:10 ですから私は、キリストのゆえに、弱さ、侮辱、苦悩、迫害、困難を喜んでいきます。というのは、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」キリストのゆえに、これらのものを受けて

いても、それを誇りにすることができるのです。

1C 重い栄光と軽い患難

信仰においては、このようにして比べることをします。パウロは、苦しみについては、「ロマ 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないとは私は考えます。」と言いました。また、こうも言います。「Ⅱコリ 4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、私たちにもたらすのです。」パウロの受けた苦難は、尋常ではありません。しかし、それをパウロは「一時の軽い苦難」と言ってしまうのです。これは比較なのです。「比べものにならないほど重い永遠の栄光」と比べたら、尋常ではない苦しきさえも、一時の軽いものになるのです。それほど、後の報いが永続し、とてつもない栄光なのです。

天秤に、一方が数百キロある重さのものが片方に置かれるとします。これは、とてつもなく重いのです。自分では負いきれません。しかし、もしもう一方の皿には、数千トンの重さが置かれました。数百キロの重さの皿は、瞬時に上がります。これが、パウロの言っている、「取るに足りないと考える」「一時の軽い苦難」と言っているのです。

ですから、私がいつも強調するのは、今の苦しみではなく、後に来る世界を信仰をもって、しっかりと見つめることです。それがどれほどのものか、パウロは第三の天に引き上げられ、言葉で言い表すことさえ許されない栄光の姿だったのです。主の報いがいかに優れているのか、このことを私たちが知れば知るほど、今の苦しみに耐える力を与えるのです。だから、ヘブル人への手紙の著者は、キリストご自身にある希望がいかにすぐれているかを説き明かしていったのです。

2C 神の愚かさと人の賢さ

神は、人とは比べることのできないほど、優れたお方です。ですから、苦難のほうが、今の富よりも優れているという事が起こります。同じように、キリストにあって愚かになることのほうが、世の知恵よりも優れているということも、パウロが話しましたね。愚かな宣教のこぼを通して、世の知恵ではできなかったことを、神は成し遂げるのです。「Ⅰコリ 1:25 神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」

4A 目に見えないものを見る忍耐 27

そして最後、27 節を見てください。「**信仰によって、彼は王の憤りを恐れることなくエジプトを立ち去りました。目に見えない方を見ているようにして、忍び通したのです。**」とあります。信仰に必要なのは、忍耐です。一時であるものの、苦しみをとおります。しかし、しっかりと目に見えない方をまるで見えるようにして見て、忍び通すのです。私たちの努力は、見えていないのに、信仰の目で見ることです。信じるということ、主に信頼するということが、私たちの務めです。そうすることによって、主がご自分の栄光を私たちに示されます。そして、私たちは今の苦しみを耐え抜くのです。